

■ 人間関係研究へのアプローチ

ひとのいのち
生死の学問体系のみなおしと和学

Human beings	存在論	絶対的人間説・神との関わり
Human relations	関係論	相対的人間説・人との関わり
Human becomings	死生論	生命的人間説・己との関わり

まどかアッセマ庸代 ASSEMAT Michiyo
(人文学部心理人間学科助教授)

専門領域：学際領域・境界領域の総合のために、素人でいようとする。そのように考えるきっかけとなった専門領域の出発は、1980年代遺伝子の分子生物学 生命科学論 科学基礎論 関係論 体験学習法・行動科学の基盤となる人間関係基礎論 1990年代市民的ネットワークプロジェクト 20世紀の科学者社会に通念化された方法論の見直し又は発想転換

自分の関心領域：いのち論 和学 人間の科学性と宗教性のバランス

今後のテーマ：和学形成 日本語のコンセプトによる学術・

ひとの安らぎ

自分の方向性：老いること 死ぬること

(生産看死から生老病死の生命観と時代・文明探求)

人間関係研究センターでしたいこと：1972年創設の伝統を踏まえ、新しい研究・仮説化作業を通して事業継続展開。毎年毎年できることをしていくうちにいろいろ時流(人の意識の傾向)が助けてくれている。数年前は「ホリスティック」生命論、今は「和」学という「自己化」の場づくり。まどやかに集う【場】の合理と不条理を 「いのち」「関わり医療」「ホリスティック医学」という視点で意識化していくワーク。講座でなく、研究会という形での自由な発想が生み出される場づくり。現場を持っている人との生産的思索と施策の場づくり。「生と死」を語り合える言葉の場づくり。異文化コミュニケーション：Verbalian/non-verbalianが仲良く生活できる工夫。

長期短期の具体的ビジョンとのつながりは本文中に掲げていく。

私が「人間関係」という「新しい視点での研究」に出会ったのは、1983年ごろ、約17年前となる。「関係存在としての人間理解の場」であることが、少しずつそこに生活してきて最近になって実感としてわかるようになってきた。

その頃の私自身は学生以来「生命」「人のいのち」をライフワークとして10年目頃で、「生命科学をもたらす新しい視点」を実践的に整理していこうとしていた時期である。ことに、偶然に出会った『人間関係科』という大学レベルでの研究共同体の考え方と教育的チャレンジはフィロソフィーとしてはかなり新鮮なもので、「当事者」発想の「主体客体一体型の」人間の生命の学問方法論と共通点が見出しやすく、当時の私としてはかなり違和感なく、「生命科学論と人間関係科共同体論」がつながり、そこでの研究生活が始まった。

実際には「人間関係」や「人間関係科」への学生意識やスタッフの需要（受容）度は自分とはかなり違うもので、自身の常識をさまざまな形でくつがいがされたが、学究的立場は覆されるよりはむしろ確信に一步一步近づくトレーニングの場となった。共育の実現の場となった。こちらは分かっているにもかかわらずあちらに分かってもらえないという観が強かった。

学科と人間関係研究センターの両方の所属があることは誠にありがたいことであった。やはり限られた年令と年数の学生との生活では十分に満たされない研究テーマの豊穡とした議論の場が必要であった。研究センター員としての自覚のもとで、学外、特に地域ベースにさまざまなネットワークが広がった。

2000年度より、南山大学人間関係研究センターとして新規スタートし、形としては、南山大学教員としての所属学科：心理人間学科とは単独別枠に、人間関係研究センターだけが独立して社会人対象の講座を展開しながら研究活動が継続される。

私自身の南山での研究教育生活の大テーマは何ら変わらない。それは、「キリストのいう『私は道であり 真理であり いのちである』（ヨハネ14.8)のこの「いのち」とはなにか。」である。現代の学問が科学志向であるため、私はまず生命科学を修め、生命の学問とはどうしたらよいか試行している。ただそれだけである。自分の生と老化と死をいきつつ。

自身の活動に関していえば、現在は以下に焦点化している。

1. 【ホリスティック生命論ワーク】 Holistic Integration of life という体験学習の人間観と発想法と手法による生命論プログラム開発、(20世紀後半誕生し、1970年代日本に台頭した生命科学と体験学習法の自分史のなかでのドッキング)

2. 【和学研究】の発足 japonologieとしての「いのち」論（現時点での私の結論を温める）
3. 日本人の身体心情にあった【生命医療医者養成】のための生涯学習と異業種（産官学民）プロジェクト型ネットワーク（社会のニーズに答えて）
4. スピリチュアルトレーニング【霊性教育】と大学教育における生命（科学）論（南山大学スピリットの特徴を生かして）
5. 異文化コミュニケーションの創造的共存：人間の世界観宇宙観の視点枠としての【「宗教」人と「科学」人】との対話と協働（知と信、男性性と女性性、頭・こころ・からだ・たましひの問題と和、やすらぎ）、二律背反の冷戦の課題はあらゆるところで続いている。
6. 素適に生きること（不可能への限りなき日常的営み）、‘それでも生きる’【不条理を生きる】という生命論を忘れないよう生きる。

学校教育・現代科学教育において、化学科(核酸化学、分子遺伝学)出身の私は、ヒト種の生命現象の自然科学的アプローチによる解明と同時に、人間のいのちや人間らしく生きることを実現できる生活や生き方を問い掛ける学問を「生命科学」に期待していた学生・研究生活を1980年代していた。

1970年代の日本において、生命科学という領域は、動物植物鉱物分類中心の生物学にとって、物理化学的手法が強く、学問領域として位置付ける渦中であった。新旧世代の議論伯仲／日本上陸の生命科学の新しい夜明け途中にあり、また、化学・物理学にとっては、「生物生命」を物質としてどのように位置付けて研究プロトコルを立てるかが模索されていた。まさに「日本における生命科学の台頭期」が私自身進路を問われ続ける学生時代であった。私がカトリックミッションスクール進学校の理系高校生時代に「分子生物学科」が埼玉大学理学部に創設された（江川不二夫初代学科長、コロイド化学、生命の起源研究）。化学科の女子大生時代に三菱化成生命科学研究所（江川不二夫初代所長）が、大学院進路選択の頃に東京工業大学に生命化学専攻（有機化学合成）が、「生命」ということばを、初めて自然科学系の領域に立ち上げた。その2年後に上智大学生命科学研究所（生命倫理や科学基礎論の研究室を含む理系大学院併設）が創設されることが予告されていた。

当時は、「生命」と言う語は、『人間性』『精神性』の特徴あることばのために、『物』『物質性』『物体性』『数理』『精密性』『一般性』『再現性』『統計』を重んじる自然科学・精密数理科学の領域で扱うことがタブー視されていたので、『生命』と『科学』をいっしょにして「生命科学」という言葉を使用することには、科学者当事者の間で議論もあった。つまり、欧米発信の「Life Sciences」なのだが、日本語訳語の普及時期であった。したがって、学生であった私自身、「生命科学」ではなく「生物科学」専攻と名乗るよう厳格に指導されていた。

つまり実験実証のない科学研究は「科学」ではないという指導である。生命科学は ヒトの生命現象ヒト遺伝子の生命現象を対象としていくゆえに、ヒト・ひと・人・人間の生命活動全般につながる広大な領域も同時に網羅しうる未来の方法論を予感させていた。

「人の生命」あるいは「ヒト ひと 人々 人間」の生命のdiscure描写は、そのまま医学／医療制度／教育制度／学制という社会のあり方に直結してくる課題である。「人間関係」「関係論」「人間論」はどんな専門領域の“出身”であろうと現代人が取り組む「現代論」「今 ここ（日本）での科学技術社会論」である。

現代の高校生が「DNA」を教科書で習うほど、生命を物質で見る視点が、ポピュラーになったのは、この「分子生物学」的アプローチの普及による。生物を物理化学的手法で、分子原子のレベルで見る研究アプローチが確立される歴史に携わる研究チーム（厚生省管轄、及び文部省管轄）に、私自身は身を置いた。発がん物質（DNAのメチル化と 生体内がん抑制酵素の生化学・分子生物学・分子遺伝学）領域の科学者と生活を共にした。

私自身は「今 ここ」という新領域（LifeScienceの訳語：生命科学）の台頭（1950年代）と日本での普及時代（1970年代）と共にいた。1953年DNA二十螺旋構造発見チームとも関わり、1960年代の分子生物学の台頭に携わっていた研究チームを先人として、日本での「生命科学」を修行することにより、人間の生命のサイエンス（科学そして学問）に期待して行く中で、「人間関係」という新領域の形成と出会い、日本のことばによるいのち論形成の今日に至っている。

「いのち」をキーワードに生命科学と人間関係科での学問方法（体験学習法をもたらし人間観・学問の発想法）に共通の基礎論・認識法を見出す思いがした。（madoca、1990上智大生命科学研究所紀要・1997南山短大紀要参照）

以上*****その1*****2001年新春記す*****

「主に立ち返ろう」。これが、南山大学移籍直前の1999年11月南山（大学）50周年記念式典に参列した時の「祈り」であり、「気づき」であった。あの会場ではっと気づかされた。そうだ、私と南山の接点は実にこの「主」だけなのである。嫌味でなくきいてほしい。こういう人も100人に一人はいるんだという程度にでも受け止めてもらえるとありがたい。現に、南山入学動機の100人に一人か二人の学生が「カトリック大学としての南山」に期待して又はつながりを感じているという（2000年心理人間学科生へのアンケート）。

この読者あなたにとって主とは何者か？ 何をもって「主」と呼ぶか？ 主、真理の表現法・描写法は、時代（意識）や人々の納得法で異なったり、変遷しうるものである。「人間関係科という学習共同体」において、必ずしも「神を神と呼ぶ行為やことばは、受け取られがたく、むしろ「関係神学」「関係存在」

としての人間の真理探究が主流となった。即ち「主」のテーマは、信仰（信）の問題意識から、神学・科学（知）の問題意識に限定する科学知中心の時代意識に、現在の大学はさらされている。つまり、「人間関係」「体験」の学の形成への試みの歴史を基礎論的に言い換えると、神の所在の点検・表現の見直しという「真理の所在・実存のパラダイムシフトの実践」が試みられていたと捉えている。（外在型ではなく内在型重視の真理探究：madoca1989「人間関係」）。これは、15年間の人間関係科という研究共同体での研究生活の「スタート時の私の先見」と「ターミナル時の私の実感」である。

15年間のニンカン（人間関係科の愛称）での学びや研究は、必ずしも研究教育スタッフ同士のコンセンサスを取りながらの「人間関係科」観・「人間関係」観ではない。むしろ、学習共同体という縁で偶然出会った者同志（学生教職員という人間環境や研究環境や社会的環境）の人間尊重・人間関係の試行・手探りという research であろう。研究領域としての research process の言語化がそのまま「ある人間観」の実証にもなるし、仮説化（一般化）にもなった。実践的でもあるが、実証的基礎論的理論：仮説のもとでの生活行為を伴う人間関係の場の理論の構築も、自分自身の中ではおこなわれていた。各人の土壌で培われていた。

「主」を、私は何と呼ぶか。シュ（shu） ス（su） という音で呼ばれる「主」の音のもたらす seigneur、「神」なる存在、「真理」の实在を、私たちは何と表現するか。

この人格関係・対話関係の創造のたゆまない試行という「人生」「信仰生活」。その行・生活・「いのち」を通しての「ことば」探し。「主」を私は何と呼んでいるか。。。。。

呼ぼうとしているか。。。。。。。

どう答えようとしているか。。。。。。。

「主に返ろう」、と先に言ったのは、「私自身が「主」を「主」と呼ぶ生活に返ろう」、ということである。科学の言葉で、その国の人々に分かりやすい言葉で、文化のレベルで、心のレベルで、感情・気持ちのレベルで、その村町地域性（群れ・グループ・集団）のレベルで、霊的レベルで、体のレベルで、物理的に情緒的に学究的に…とあらゆる「表現法」を、レベルに合わせて、レベルに沿って、気づかされてきた。「主」を「主」と呼ばずに、時代の精神（人々）の共通語を求めるうちに、私自身は「主を主と呼ばないように」生きてしまったのがニンカン時代である。カトリック（社会）と科学（社会）の在俗化期であった。

しかし今、「主は主なのだ」という生活意識を繰り広げていく時期が私の中で再び来ているということだ。

人間関係科の発想法・人間主体性と共に、「神」「主」の主体性を、いかに表

現するか。その Life Style, Life Philosophy, Life Science, INOCHI
いのちのテーマを通して。そして「あのイエスキリストの言葉で「私はいのち
道 真理である」と言ったという「いのち」を生きて死のうとしていく ひと
のいのちとは何だったのか。

「人間関係」研究センターの母体で出会った人物として、初代人間関係研究
センター長リチャード・メリット元教授及び竹内敏晴教授がいる。お二人の退
職時の言葉には、共通して、キリスト教もしくはキリストイエスとご自身との
かかわりを思索しておられることを感じるものがあった。私自身の人間関係科
の風土の現実 もしくは南山学園で働くことの現実の限界と挑戦のいきとして
受け止めたのを未だによく思い出す。自分の南山とのご縁の原点として、ここ
にその言葉をしるして、あらためて、自分自身が人間関係研究センターと関
わる原点もしくは現実を肝に銘じておきたいと思う。

メリット氏の退職時(1986)、シモン学長時期、竹内氏は教授(からだとこ
とば)として、私は講師(自然科学概論、総合科目女性論等)として赴任した。
メリット氏の教授会後の挨拶の中に、『自分は キリスト教ということを学科
の中で前面に出してこないようにした。それはそれで善しであったし、必要な
ことであったのだが、不十分さもあった。』というように私には聞えていた。
竹内氏の退職(1995)時、インタビュー記事のため直接お話を集中してきく機会
に恵まれたのだが、かなり本音として語って下さったのもやはりご自身とカト
リック(キリスト教ではなくカトリック)との根源的姿勢についてのものだった。

いずれも私の受け取ったメッセージは、「人間関係」で生きることの限界で
あった。これは人間理解の根本的探求、人間関係研究のアプローチの哲学的課
題でもある。私自身はその意味でもいま人間関係研究センターでの研究をどの
ような切り口でどのように秩序付けておくかという人間関係基礎論も自身に問
われつづけていると思っている。先人の言葉やニンカンで出会った姿はやはり
どのスタッフからであれ、関わり存在としての自己自身として私の中で生きて
いる。

とりあえず、わたしの切り口は「人の生命」科学基礎論(生命科学とは何か、
いかにあってほしいか、生命の学問の方法論)なのである。宇宙における人間
の位置(Teilhard de Chardin1942)の発想から、宇宙における己の位置、
科学における自己の位置づけの作業(madoca1995南短懇話会 留学報告会)
は1970年代からの自身の実践的領域を踏まえた生命科学基礎論(1982-)及び
人間関係基礎論探求(1986-)での共通の土台作業であることを、15年間の人
間関係科での実践的学習研究生活の中で再確認して今に至っている。10年間の
生命科学とカトリックの畑での生活と息づかい、15年間の人間関係科という畑
での生活と息づかい、そして、この創刊号に始まる南山大学人間関係研究セン
ターでの思索の意気をここに留めておく。

以上****その2****2000年夏記す****